

社說

說

づ其身を謙み前途の希望を長うせんめどを敢て勧るものなり

少年の人々が世に出でゝ身を立てんとするには先づ志を大にして例へば政界に出づれば大政治家たらんとを期し實業に従事すれば大富豪たらんとを期して遂に目的を達するの抱負なるかららす期する所大にして事の中庸を得べし一身を處するには細に注意して極めて小心にてありながら志は多々ます／＼大ならんとを達する所、小さな人は人事の常にして其志、大にして始めて事の中庸を得べし一身を處するには細に注意して極めて小心にてありながら志は多々ます／＼大ならんとを期し

# ○北清所見

明治九十二年五月八日 星期日曜  
志ある小の何

か或は多年の辛苦事業が成らすして身先に死したるものあり或は將に成らんとするに際して倒れたるものも居たとして其間を嘗て幾回幸に生存したもののが今日の地位を得るのみなり又彼の言葉とても其富を成したるは本來實に非常の辛苦職業を嘗め盡し時どしては死生の境にも出入して漸く成功したるものに外ならず今の中年の如く少しく地位を得るときは忽ち情氣を憐はして眼前の難済道難と志にする體たらくにては如何に大言壯語して自から餘ふも到底發達の望はないのみか遂當り一身の陥落を免る可らず其志の小さなは既々の事にして他人の敢て關せざる所なれども左ればとて假りにも文明の教育を受けて將來の望少なからざる輩が酒色相争ひて斯る有様とは傍より見ても堪へ難き木鎧なり我輩は其人々が少しく志を大にして先

元首の邊外小競りかで新軍を組織せんと計畫したる袁世凱は其後の計畫既に熟したるにや此項は既に人數も集まり獨逸士官二十名を聘して日本其教練に從事するものゝ如し今彼れが兵士を召募するの如し且つ品行方正にして從來犯罪せざるものに限り又開片を獎するものは之を採用せず其馬匹は惡癖なく年齢五歳以上七歳以下とし斯くて合格したるものは多くは東三省地方のものなりと云ふ斯の如く今回將員每馬一日大錢二百五十文(五十錢)を給し少しく文字あるものは更に五十文を加ふる旨にて新募したるもののは多くは東三省地方のものなりと云ふ斯の如く今回其の新募したるのは多少の制限あるを以て稍々軍隊らしきものを組織し得べく從來の如く老少打混じたる義理の軍隊に比すれば又多少見るに足るものあらんか

○北清所見

て武備學堂を添設し西法に照して教習せんとす。前きに臣吉林の邊地は其狀況内省に異なるを以て兵勇を添加し前きの北洋大臣李鴻章より武備學堂の吳修云、孫靜仁、徐振常等三名を分擔せしめ營に到りて各々教習に従はしめたりと雖も三人各路に分往するが故に其往返に時日を費し且つ其勤情を查驗すべからず近來南省も亦北洋に倣ふて學堂を設立し以て將材を作るの基礎を立つ今德勝門外に武備學堂を設立し吳修云等を以て洋教習となし各營親兵砲隊より兵勇各五名を抽發し西法に倣ふて教習せしめ業終れば各其營に歸し以て武備を整へんとして先づ試みるが一年若し功を見るべきものあれば更に旗民子弟の年内力精壯資質聰穎のものをして堂に入らしめば所謂軍事を治め兼て人材を育するに足る是れ自強の道なり云々と戰敗以後軍隊改良の聲端となるを得ば是れ實に我日本の賜なり

船の前後に空氣を密閉せる船艤のあるが爲め之を覆ふ  
とするも自から浮み上り船内へ半分も水を入らるゝを  
得テ斯て埠頭の傍に船を擱まし水を充たし彼  
の船艤の上に一人づゝ立ちたれども沈没するのみか抑  
へし手を放すや忽ち半分ほぞ水を擱し埠頭上かりし  
云々

押  
風

七回 嵐

卷之三

「入來りたるは熊之權となり、權は喰元に布切を巻き居たり。此家に泊込みたる大勢の手を借りて、返済となさんとて來りけるに、意外にも押嵐を始め、長に結までふの席に居たるに驚き、次の間に仲間を呼出しして、怖嚇ぐふと多時、再び出来りて、城瀬川の前に腰を屈め、『親分、權を研つたなあ、その縛られし居る野郎です、間